

Hiroshima and Peace 2016 報告書

国際教養大学 2 年

梅田 実帆

(秋田県秋田市)

2016 年 9 月 30 日

【広島訪問を通じて感じたこと】

平和記念資料館にて行われた被爆者講話会に参加した 8 月 4 日の私の日記には、このような言葉が書き残してある。

“おばあちゃんの話聞いていたら、こんなに「生きる」ということが辛く苦しい時代があったのか、と思ったのと同時に、被爆者として自身の体験を講話してくださっている方々が死んでしまったら、私はどうやって戦争体験を語り継げばいいのか、分からなくなってしまう。そして、思わず講話会が終わった直後におばあちゃんのところへ駆け寄って、びえびえと泣いてしまった。”

おばあちゃんとは、私の祖母のことではなく、当時広島で被爆した被爆一世として、平和記念資料館地下一階の会議室にて、自身の体験を講話されていた女性のことである。スクリーンに映し出された絵や写真を提示しながら、刻むように言葉を発していくその姿の端々から、誠実さと優しさが溢れだして、戦争中にどのような思いで生きていたのだろうと思うと、自然と講話の内容に意識が吸い込まれた。そして、その女性の話を聞きながら、私はこれまで、自分の祖父母から戦争体験を聞いたことが一度もないということに、その時はじめて気が付いた。戦争体験を人づてに聞くということはこれまでもあった。高校在学時には、修学旅行で長崎を訪れた際に、原爆投下時に長崎にいたという被爆者の方の講話を聞いた。

しかし、広島平和記念資料館で行われている被爆者講話会を聞きながら、そのとき私は初めて後悔の念と凄まじい不安に襲われた。なぜ、今まで戦争体験を聞こうと努力してこなかったのだろう。なぜ、おじいちゃんが死ぬ前に彼らの経験を聞いておかなかったのだろう。被爆者がみんな亡くなってしまったら、私はこの悲惨な過去をどう語り継げばいいのだろう。そう思うと、いま自分の前で講話をしている被爆経験を持つ女性が、まるで自分のおばあちゃんのような気持ちがしてきて、その方の話す戦争体験が、自分の目の前にも広がるような思いがした。8 月 4 日の日記でおばあちゃんという言葉が自然と選んでいたのは、そういう思いが心の中にあっただからだ、と今になっては思う。

広島で学んだことを忘れてはいけない。

今回の広島訪問で気が付いたことがふたつある。ひとつは、平和を死ぬ気で守っている人々の存在である。もちろん、憲法 9 条の存在や、時代の流れというものを無視するつもりはない。しかし、それ以上に、「もう同じ思いをしてほしくない」という気持ちのもとで、ここまで決断と行動を重ねてくださった先人の血のにじむような努力があつてこそ、平和は保たれてきたのだと強く感じる。今年の 5 月に、アメリカ現職大統領のバラク・オバマ氏が現職大統領として初めて広島を訪問した。とある被爆者の方は、現職大統領の広島訪問を訴える手紙を、アメリカ政府に対して数十年以上にわたり送り

続けていたようだ。歴史的瞬間の陰には、それを願い、行動し続けた人がいた。

パンドラの箱に封印し続けてきたはずの悲惨な被爆体験をあえて言語化することで、戦争体験を後世に伝え続けている講話者の方々。今は平和記念公園となって蘇った焼け跡の中、こどもたちを案内するボランティアのおじいちゃん。向学心のある若者を広島に招致している平和首長会議の職員の方々。それに携わってくださっている、平和首長会議の加盟市町村の担当職員の方々。私の想像以上の規模で、私の想像以上の数の人々が平和を守ってくれているということに、改めて気付かされた。

広島訪問を通じて、もうひとつ気付いたことがある。それは、戦争を体験したことのない人間がどんなに頑張ったところで、戦争体験を追体験することは不可能だということだ。Hiroshima and Peace のプログラム期間を通して、2回の被爆者講話会を聞くことができた。留学生とともに様々な授業を受け、ディスカッションをして多面的な意見を吸収した。原爆で命を落とした方々の遺品展示を見学した。オバマ大統領の手記と手折り鶴を見た。資料室にあるはだしのゲンを改めて最初から読みなおした。天井が吹き飛んで消えた原爆ドームを何度も見に行った。自分の想いを綴った色紙を張って、灯籠流しをした。平和記念式典に参列して、これまで感じたことのないほどの沈痛な気持ちで、多くの人と午前8時15分を迎え黙祷した。それらすべての経験は私にとってあまりあるほどに貴重であり、戦争に対する想像力と教訓を得るために最大限に役立つものだった。しかし、それは戦争を体験することではないと悟った。どんなに怖いのかも、どんなに辛いのかも、結局のところは共感することができない。自分自身の経験として消化することはできないし、いくら頑張っても、戦争を追体験するなどということは不可能だった。そして、それが分かった今だからこそ、自分にはやらなければいけないことがあると思うようになった。絶対に戦争体験を追体験することができないとしても、戦争がもたらすものとは何かを想像し、思いを寄せる必要性と危機感は常にある。自分を含めた、戦争を体験していない人々に対して、平和の尊さを訴え続けることの必要性を、以前にも増して感じるようになった。

【活動計画と平和首長会議への具体的な企画案】

①映画鑑賞会の定期的な開催

ねらい：

核兵器を取り巻く問題を、映画という手段で視覚的に提供することで、たとえば原爆後遺症の戦後差別、外国人から見た原爆の姿など、これまで言葉ではあまり語られてこなかった物事の側面を少しでも浮き彫りにする。

概要：

・「黒い雨」「ヒロシマ・モナムール」など、原爆を題材とする日本映画や外国映画の上映会の定期的な開催

②企画展示「核兵器廃絶をめぐる過去と未来」

ねらい：

原爆や核兵器に関する展示は、多くの場合、原爆の悲惨さを紹介することで完結してし

まい、先進国の核兵器保有状況や原子力発電などといった、現代社会の問題にはほとんど触れてこなかったように思う。しかし、実際それらは同一の問題としての共通点を抱えており、切り離して議論すべきではない。そこで、「核兵器をめぐる過去と未来」というテーマ設定のもと、原爆投下や水爆実験の歴史、核兵器保有の現状、そして今後の核兵器の廃絶を、俯瞰的に展望できる企画展示を目指し、核兵器廃絶という目標を、出来るだけ身近な問題として人々に認知してもらおう。

概要：

- ・地域の図書館や公民館などにおいて、蔵書や写真集、パネルなどを使用した企画展示を開催
- ・原爆投下をめぐる歴史概要にとどまらず、第五福竜丸事件やビキニ沖の水爆実験、日本を含めた世界のあらゆる国で稼働する原子力発電の問題などを取りあげる

また、この企画案に関連付けた個人の活動としては、国際教養大学内の中嶋記念図書館にてパネル展示を開催したいと考えている。中嶋記念図書館は、日本国内においても豊富な洋書の蔵書数を誇る図書館である。はだしのゲンの英訳版や米軍隊員による手記など、洋書や外国語資料を多く展示し紹介することで、一般利用者の地域の方や小中学生だけでなく、外国からの留学生に対しても、核兵器廃絶という確固たるメッセージを届け、平和学習としての大きな意味合いを持たせる。

③平和記念式典や戦没者追悼式への若年層の参加促進

ねらい：

8月29日の秋田市戦没者追悼式に参列した際、献花の遺族代表者としてスピーチをされた男性がとても力強く、また平和へのメッセージを読み上げる代表の小学生と中学生のとても凛々しく逞しい姿が印象的であった。その一方、こどもや学生の参列者がほとんどいなかったことに驚きを隠せなかった。参列者のほとんどが黒いスーツ姿の年配者であり、見渡す限り、こどもや学生の参加者は、私を除いてだれもいなかった。その経験を踏まえたうえで、例年執り行われる平和記念式典や戦没者追悼式における、こどもや学生の参加を促し、平和への関心や問題意識を少しでも多くの若者に持ってほしいと思う。

概要：

- ・平和を題材にしたポスターのアイデアを、市内の小学校や中学校から募り、最優秀作品として選ばれた作品を、同年度の平和祈念式典・戦没者追悼式の告知用ポスターとして採用する。採用されたポスターは秋田市役所や秋田県庁、そして秋田市内の教育機関等に掲示することで、平和祈念式典・戦没者追悼式の告知を強化する。
- ・戦没者追悼式・平和祈念式典における「平和へのメッセージ」に、小学生、中学生部門に加えて、高校生、大学生部門を新設し、秋田市内の高等学校や大学機関からも、平和へのメッセージを発表してもらおう。

以上